手塚富雄著作集 5

手塚富雄著作集

手塚富雄著作集　第五巻
定価五〇〇〇円
昭和五十六年四月　十　日印刷
昭和五十六年四月二十日発行
著者　手塚富雄
発行者　高梨茂
印刷者　青木勇
発行所　中央公論社
〒104　東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八一　検印廃止

手塚富雄著作集　第五巻　ドイツ文学論　目次

ゲーテの世界の特質　三
ゲーテの詩論についての断想　一〇
『ファウスト』における死の問題　一七
『ファウスト』一つの読み方　二四
『若きウェルテルの悩み』　六九
ヘルダーリンにおける愛の問題　七九
ヘルダーリンにおけるキリストの問題　一二
ドイツ近代詩人論　一四
ゲオルゲの中世詩　一四
教場内の或る時間より——ゲオルゲの恋愛詩について　一五
詩人メーリケのフモール　一六
三つの作品　一八
歴史小説の一手法——コルベンハイヤーについて　二〇

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

地底の消息――カロッサの『成年の秘密』について　二二八
カロッサの『美しき惑いの年』　二四六
ハンス・カロッサの内面の生成　二五九
クライスト『アンフィトリオン』　二〇三
シュトルムの『みずうみ』その他　三一一
コルベンハイヤー『神を愛す』　三二一
ハイデガー『ことばについての対話』　三二八
三つの答え　三四一
ハイデガーとの一時間　三四八
ドイツ文学の主性格　三五五
現代ドイツの抒情詩　三六七
トラークル小論　三八九
現代詩人としてのトラークルの位置　四〇一

二つの老年詩　四〇五
日独修好百年と文学　四一六
わが道――ドイツ文学　四二三
「虚」と「実」と――硬教育で興が湧く　四二三
戦慄――北欧文学に傾倒　四二五
詩人たち――ゲーテの神髄　四二八
東大時代――生きた学問を　四三〇
〝高峰〟との対話　四三二
あとがき　四三六

ドイツ文学論

ゲーテの世界の特質

ヴォルフガング・ゲーテについて申し上げます。

ゲーテが、ドイツを越えて世界的に近世近代の大詩人でありますことは、一般の動かぬ評価でありまして、その八十二年余の生涯にわたる厖大な著作や文書の一端に触れましても、改めてそれを確認する思いが致します。しかし、彼という存在、およそ彼が築き上げました世界の特質を端的に把握しようとしますと、さまざまの見方が可能で、その核心を射ることは必ずしも容易ではありません。彼を「人間らしい人間のうちで最も偉大な人間」と評した者も、その人生智をたたえて「賢人」と呼ぶ者もおります。また彼が詩人であり、政治家であり、自然研究者でもある多方面さと普遍的な視野は、つねに驚嘆をもって語られております。それらの見方と並んで次のことも充分の確かさをもって言いうると存じます。それは、彼のあり方と仕事のすべてが、人間として充実して生きよう、己れの受けた生命をつねによりよく生長させようという意志と分ち難く結んでいることであります。従ってそこに生み出されるものは常に生気と活力に充ちております。ことに彼の本領である文学制作においては、そのことが最も躍動的に現われ、非常にしばしばわれわれは生命のリズムそのものに触れる思いが致しま

す。青年時代の力強い詩の優れたものは、そのことの最もよい例証であります。大きく見ますと、ゲーテの生涯の仕事の運びに生命のリズムが辿れることが研究者によって指摘されております。生きることと仕事とが密接に結んでいることが、おのずからそういう結果になったと思われます。

以上、生命のリズムということを繰り返し申しましたが、ゲーテは円熟期にはいりますと、おのが考察の対象としてもそういう事柄に深い関心をもつようになりました。生命のリズムの現われる根本的な現象は、息を吸い、また吐く作用、そして心臓の収縮・拡大であります。この基本的な、いわば最も単純な現象が、彼の世界考察の中で時と共に重い意味をもってきました。彼の六十歳代半ばの作の『西東詩集』の一詩にはこうあります。

呼吸には二通りの恵みがある、
空気を吸いこむことと空気から解放されること。
前者は胸を圧迫し、後者は胸を爽かにする。
このように生命は霊妙にまじりあっている。
それゆえ神に感謝せよ、神が君を圧迫するときは。
また神に感謝せよ、神がその圧迫を解いてくれるときは。

生命のあかしは、固定した状態や一方的な運動だけにはありえないことを深く思い、その上で困難の多い人生に対処する心構えに説き及んだのであります。生命観に基づくこの人生智はわたくしどもを導く指針とならずにはおりません。

さて、このようなことから窺われる彼の生命観は、決して一時の詩人的な思いつきではなく、実は多年にわた

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

る彼の自然研究と密接に結んでおり、それに支えられているのであります。それでしばらく自然研究者としての彼について申し上げたいと存じます。彼が自然に向って心を開き、自然における生命の脈動に触れようとしたことは、若い頃の作品にもよく現われております。しかし二十六歳にしてワイマル公国に迎えられ、やがて政務の実際に携わるようになりましてからは、それが機縁ともなって、真剣に、かつ学問的に自然研究に踏み入りました。そして功利の立場を越えて関心の領域を拡げ、地質学、鉱物学、解剖学、骨学、動物学、植物学、形態学、色彩研究等に熱心に従事し、それらについての執筆や発表もまことに多く、自然研究は生涯の最後まで、詩作と並んで彼の最大の情熱の対象となりました。その一例を申しますと、人間にも上顎の門歯を受けている顎間骨が顎骨に癒着して存在することを発見しましたのは、研究上の彼の最も有名な業績でありますが、彼はそのことを即日友ヘルダーに報告し、「言葉に尽せぬ喜び」と申しております。

個々の事はしばらく措きまして、全体として彼がどういう態度で自然に対したかと申しますと、彼は自然を、無限の生産性をもって生成してやまない有機的全一体と考えたのであります。一切は相互に連関して自然のうちに抱かれております。中でも生命は自然の最も美しい発明であり、死さえ多くの生命を得んための自然の術策であるとされます。従って自然と人間との関係も密接不可分であることは勿論でありまして、人間はこぞって自然の中にあり、また己れの中に自然を有しております。それゆえ彼が自然を探求しますのは、大きい生命である自然と、それを母とする子との間柄ということになります。彼の愛する古代哲学者の言葉に「もし眼に太陽の性質がなければ、どうしてわれわれは光を認めることができようか、云々」というのがあります。ゲーテはこれを敷衍して「眼は光があってこそ存在するようになった」のであり、眼は光に触れて光に適合すべく自己を形成し、そして内なる光が外なる光を迎えるのだ、という意味のことを述べております。この「同じものが同じものを認識する」という考えが、自然に対する彼の認識の根柢にあります。そしてそこからは必然的に、生きた自然の消

息に通ずるためには、自然と同属である自分もその模範に倣って生命に充ち、生々発展するものにならなければならないという考えが出てまいります。自然研究は生命への意志と一体となります。

このように申しますと、ゲーテはただ詩人の心をもって自然に向き合ったのだという批評も起りえましょうが、彼は決して自然を心情的に、また概括的にだけ捉えようとしたのではなく、つねに自然の個々の事象を観察し考察して倦むことがなかったのであります。それゆえにこそ彼は自然研究者の名に値するのであり、またそれに基づく自然観・生命観がわれわれに耳を傾けさす力をもつのだと存じます。

それではそういう具体的な観察が何を眼目として行われたかと申しますと、それは主として、自然、中でも生命体である動植物が、おのが固有の性質を保持しつつ弾力的に環境に適応して驚くべき多様性を生ずる変化の有様を、自然の示す形態に即して把握しようということにありました。そのことは当然個物と個物との間の比較を要求します。比較は個物の特殊な相を越えて、その根源である共通のもの、同一的なもの、根源的典型を指示します。その典型に溯ろうと努力し、また予感されるその典型から多様な個物へ発展するさまを跡づけようと致します。先程申しました顎間骨の発見もその意向の中で起った事であります。いわば大自然の創造を追体験しようというのであります。しかしその彼は、人間の認識には限界があることを明確に自覚しており、力の限り探求して根源現象というべきものに達してそれに驚嘆したら、それ以上のことは人間に許されていないということを繰り返し強調した人であります。

その根源現象の把握の一つと申すことができますが、晩年の彼には次のような深い見解の表明があります。それは、全自然にはそれを動かす二つの大きい動因があって、一つはすべての物事に極と極との分れが生ずる分極性、他の一つはより高きをめざしてやまない上昇・向上の性質である。前者・分極性は引力と斥力、男女の性別、呼吸、光と闇、その他さまざまの現われ方をして、物質に属し、後者・上昇は精神的のものである。しかし物質

は精神がなくては、また精神は物質がなくては、存在も活動もできないので、精神も分極性に作用され、物質も上昇することができる、という内容のものであります。

精神とは広くは生気も意味されておりますが、自然界に物質と精神の両面を見て、そのどちらにも独裁を認めず、分極性と上昇とを併せ捉えたところが独特であります。ここに至りますと彼の自然研究は一種の自然哲学であり、詩でもあり、人生観でもあります。それらが一つ根から発して、彼の世界を豊かにしているのでございます。

思潮史的に見ますと、ゲーテはルネサンス以降の人本主義の大潮流の中の一人で、人間の可能性の発揚発揮をめざしたのは自然のことであり、彼があれほどに多方面の人となったのも、その現われと見られます。そしてこの能動的態度は彼の詩作品にも実に力強く現われております。その頂点をなすものは彼の生涯の大作『ファウスト』で、その主人公は、苦痛も快楽も全人類が受けるべきものを味わいつくしたいと叫び、そのために言わば手段を選ばず邁進するのであります。しかしそれだけでは人間の真のあり方は成就されません。ファウストは年老いて共同体意識にも目覚め、海岸の埋立て事業に力を尽しますが、それさえも事業としてだけ見れば、幻影的なものにほかならないことを、老ゲーテは自らの生涯を裁断するかの如く仮借なく書いております。ファウストはおのが力に自足するほかに、人間として浄化され、高められなければなりません。そしてそれへの導きとなるのは、行動性を主とする男性的原理に、その対極としていつくしみや和らぎに充ちて手を差し延べる女性的原理であります。この両者の融合によって、より高い人間性が実現されるであろうことが、この作の終りでゲーテが暗示していることのように思われます。よく引用されます結びの句「永遠の女性　われらを高みへ引きゆく」の意味はそこにあるかと存じます。

さらに老ゲーテは、青年時の突進的態度とは際立って対照的な思想を打ち出すに至りました。長篇小説『ウィルヘルム・マイステルの遍歴時代』は「諦念の人々」と副題されており、諦念・断念ということが作の大眼目であります。もちろんそれは無為や静止への勧めではなく、人間が自らの意欲や行動を限定し制限することによって真の集中的活動に達しようというのでありますが、ファウストのあの拡大的志向に比べれば、明らかに集約的な態度であります。人間の生は、この両方向が共に働かなければならないというのが、ゲーテの洞察したところであります。

その集約的態度が見事に表現されている一例を申し上げます。

主人公マイステルが、遍歴中晴れた夜に天文学者の観測台の上に導かれたときのことであります。輝く星空の壮大さに驚いて彼は両の眼を抑えます。その壮大さは理解力を越えて、見る者を滅ぼさんまでに威嚇しております。マイステルはそのとき自分の精神に向って語ります。「いったい自分は宇宙万有に対して何物であろうか。自分はどのようにしてその前に立つことができるであろうか。」しばらく考えて彼は己れに言います。「人間がこの無限の宇宙に対する仕方はただ一つあるのみ。それは多方面に惹きつけられる精神力のすべてをおのが心の奥底で総括し、一つの清い中心点を自己の内部にもつことである。」そのように思い定めます。すなわち人間である制約に帰って、そこでおのれのあり方を確かにしようというのであります。それは諦念ではありますが、それを経てこそ、宇宙万有を前にしてたじろがぬ存立の根拠が得られることが告げられております。

認識の上でも、「世界を奥の奥で統べているもの」を知りたいと最初ファウストに言わせたゲーテは、「探求しうるものを探求しつくし、探求しえないものを静かに敬う」ことが考える者の最も美しい幸福、と言うに至りました。人間として生命の法(おきて)のもとに生きつつ向上をめざしてやまないのが、彼の根本精神と思います。近世以来人間の力の発揚のめざましさは申すまでもありませんが、足もとを忘れ、拡大欲にのみ走りますと、人間の文明

そのものが危殆に瀕しないとは申せませぬ。ゲーテを思い起そうという声は科学者の間からも聞えております。彼に聴くことは現代においても大きい意味をもつと存じます。

ゲーテの詩論についての断想

詩についてのゲーテの見解を体系的にまとめることは、ゲーテ自身がやっていないから、私たちは直接彼の詩論の綜合的な紹介はできぬわけである。「生きているものを諸要素に分解することはできる。しかし諸要素を組み立てても、生きているものを作ることはできぬし、それに生命を与えることもできぬ」というのが、ゲーテの心意気であった。彼にとっては常に生産が第一義であったから、分析も生産に役立つかぎりにおいて試みただけで、分析のための分析はしていない。エッケルマンの「ゲーテとの対話」が伝えるところによると、ゲーテとエッケルマンはある時（一八二五年六月十一日）美学者たちのことを話題にし、彼等は詩と詩人の本質を抽象的な方式におしこめて定義しようとするが、明瞭な結論には達していないことを語った。それにつづいてゲーテはこう言った。「あれこれと定義して何になるんだ。状況を生き生きと感ずるこころと、それを表現する能力とが、詩人を作るのだ。」つまり、ゲーテに詩論があるとすれば、それはまず第一に彼自身が詩人であることによって、作品における彼の表現そのものを通して示したのである。われわれも彼の作品に直接就いて（それは小曲、譚詩、讃歌、思想詩、諷刺詩、エピグラム等、実に多岐にわたっているが）それを抽象的にではなく具体的に受け取ることが、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com